

恵泉女学園大学日本語教員養成課程における 学生の学び

武 田 知 子

Student Learning in the Japanese Teacher Training Course of Keisen University

Tomoko Takeda

Abstract

The purpose of this study was to investigate students' learning a Japanese teacher training course in university using Personal Attitude Construct (PAC) analysis. Most of the students described how they learned many things from the experience of a two-week practice teaching program. One student reported having achieved self-efficacy by overcoming her difficulties, such as communicating with foreigners and speaking in public. Her feelings of self-efficacy became the motivation for her to participate in a study abroad program in China. In this university Japanese teacher training course, it is important not only to develop the students' teaching skills, but also to increase student's feelings of self-efficacy.

Keywords: Japanese teacher training course, Pac Analysis, Self-efficacy, Four principal sources of Self-efficacy

キーワード：日本語教員養成課程，PAC 分析，自己効力感，自己効力感の4つの源

1. はじめに

本学には日本語教員養成課程の主専攻，副専攻が設置されている。大学の規模に対して，本学卒業後，実際に日本語教師になる修了生は少なくない。また，日本語教師

にならなくとも、履修した学生が達成感を持って修了していることがこれまでの調査でわかっている（武田 2008）。こうしたことは、日本語教員養成課程での教育成果を示すものである。

しかし、現在日本語教育を取り巻く状況は非常に厳しいという問題がある。2011年度文化庁の調査によると、日本国内の日本語学習者数が2010年度16万7,594名から2011年度12万8,161名と激減していることが報告された。この減少は、2011年3月の東日本大震災、原子力発電所の事故が影響していると見られる。加えて、日本への留学者の多い中国、大韓民国との関係悪化、円高などもあり、数年は日本語学習者数の増加は見込めない。さらに、同調査によると、日本国内での日本語教育従事者は、ボランティア等が17,573人（56.6%）、非常勤教師が9,196人（29.6%）、常勤教師が4,295人（13.8%）で、日本語教師を職業として選択することは難しい状況にある。

また、大学全入時代となり、大学に入ってくる学生の多様化も進んでいる。学力面での変化に加え、精神面での脆弱さも指摘されてきている。自分に自信を持ってない学生が多い（河地 2005）との報告もある。教員養成課程における数々の課題、課程修了のための漢字検定準2級合格、指定する授業でのB以上の成績等の条件をクリアできずに、課程修了をあきらめてしまう学生も少なくないと思われる。志を最後まで全うできなかった学生は、そのことでさらに自信感を失ってしまうことも考えられる。

日本語教師を取り巻く現状の厳しさ、学生の変化といった状況の中、日本語教員養成課程は日本語教員に必要な知識・技能の習得という目的に加え、青年期にある学生たちの成長・発達の促進という目的を強化する必要があると思われる。本稿では、修了生へのインタビュー調査から日本語教員養成課程での学びを分析し、課程での実習が学生の自己効力感を高める機会となっていたことを報告する。最後に、日本語教員養成課程を通じ、学生が自己効力感¹⁾を高めていける学習環境作りについて考えたい。

2. 大学における日本語教員養成課程

大学で日本語教員養成課程を修了し、実際に日本語教師になる者は少ないという調査結果がある。文化庁によると、日本語教師の最終学歴は日本語教育以外の専攻で学部課程を修了した者が8,197名と最も多い。一方、大学における日本語教員養成課程修了者は1,193名で全体の約4%程度にすぎない（平成16年文化庁調査）という。また、大学における日本語教員養成課程では、日本語教育についての基礎知識の習得は可能でも、体系的かつ専門的なプロの教師養成教育はあまり期待できない（中川 2001）という指摘もある。

一方、大学における日本語教員養成課程の目的はプロの教師を養成することだけで

ないという意見もある。大学の教員養成課程には「将来にむけての予備軍」を作ったり、日本語教育への理解者を作ったりする（日本語教員養成研究グループ 1997）役割があり、したがって「長い人生のどこかで日本語教育と関わる機会があったときに、自ら学んでいける基礎的な力を持った学生を育てることを目的とすべき（横林 2001）」という考えもある。

学生にとっては、大学における日本語教員養成課程が達成感、自己肯定感、自己成長感等を獲得する機会となっていたことが報告されている（武田 2008）。武田（2008）は、養成課程での成功体験が学生のその後の人生に影響を与える可能性を考慮して、課程全体の学びを支援する必要性を指摘している。

3. いまどきの大学生

いまどきの大学生については、真面目に勉強する学生が増えている（武内 2003, 河地 2005）といわれているが、同時に、授業外学習時間は極めて少ない（溝上 2010）ことも指摘されている。また、辛い経験や、自分自身の性格への嫌悪感、やるべきことから逃避する自分への嫌悪感から自信力が低下している（河地 2005）とも言われている。さらに、勉強時間が少ないと感じている学生ほど自信力が低いという報告（河地 2005）もある。

溝上（2010）は『大学生のキャリア意識調査2007』での結果をもとに、大学生生活の過ごし方により学生をタイプ分けしている。学生のタイプでもっとも多かったのは、「授業外学習・読書」「インターネット・ゲーム・漫画」「友人・クラブサークル」すべての生活因子に対し得点が低い、つまり、どの活動にも無気力なタイプであったという。このタイプでは、将来のために何をすべきかわかっているが実行していないと答えた学生が50.4%に上り、実行力が乏しい事が報告されている。

反対に、「授業外学習・読書」「インターネット・ゲーム・漫画」「友人・クラブサークル」全てに対し得点が高いタイプの学生では、将来のために何をすべきかわかっているそれを実行しているという回答が47%であった。溝上（2010）は、このタイプは知識・技能の獲得意識が高く、将来展望を持ちつつ、かつ日常生活でそれを実現するべく努力し、自分を成長させようとする学生タイプだとしている。

これらの調査から、大学生生活への積極性と将来目標への行動力が密接な関わりをもっていることがわかる。学生が成長を実感するために、多様な活動に関われる環境を大学に作り出すことの重要性が示唆される。

4. 日本語教員養成課程における学生の学び

日本語教員養成課程で学生はどのような事を学び、それはどのような影響を個人にもたらしていたのかを調べるために、インタビュー調査を行った。調査協力者は、2009年3月に日本語教員養成課程を主専攻で修了した学生7名(学生A, B, C, D, E, F, G)であった。7名は2年時から日本語教育の専門科目を履修し、4年時前期の大学での模擬実習を経て、後期に日本語教育機関で2週間の教育実習を行った。インタビュー時には全員一般企業への就職が決まっていた。2009年1月から2月にかけて、PAC分析²⁾を用いて調査を行った。

調査手順は以下のように行った。手順は内藤(2002)、内藤他(2008)を参考にした。

①学生に、教示文を印刷された文章で示すとともに口頭でも読み上げる

「あなたにとって、日本語教員養成課程での経験はどのようなものでしたか。どのような場面で、どんなことを学んだと感じますか。自分自身が成長したと感じた経験はありますか。また、逆に養成課程で学べなかったこと、成長できなかったと感じることはありますか。日本語教員養成課程を履修したことは、あなたにとってどのような意味があるでしょうか。また、将来どのような意味を持つてくるとおもいますか。頭に浮かんできたイメージや言葉を、思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。単語でも短い文でもかまいません」

②イメージや言葉を自由に連想し、思いつく順にカード1枚に1項目を記入してもらう

③カードを重要度に並びかえ、順位を付けてもらう

④各連想項目間の類似度を、「非常に近い」から「非常に遠い」までの7段階尺度評定してもらい、類似度距離行列を作る

⑤HALBAU7でウォード法によるクラスター分析を行い、デンドログラムを作成する

⑥デンドログラムを基に、各クラスターについてインタビューを行う

インタビューでは、7名全員が養成課程、特に教育実習で多くの学びを得て成長したと認識している様子が見られた。紙面の都合上、学生Aの事例のみ詳細に示す。

4.1 「教員養成課程での学び」についての学生Aの自己解釈

学生Aは、教示文から以下の8項目を連想した。その後、各項目についての学生の直感的なイメージを尋ね、いいイメージは(+), あまり良くないイメージは

(-)、どちらでもないは(0)、で示した。連想後、重要順によって1から8まで数字を振ってもらったものを以下に示す。

- 1) 異文化や外国(人)に興味を持つようになった(+)
- 2) 自分の日本語(言葉使い)を考えるようになった(+)
- 3) 楽しかった(+)
- 4) 異文化にふれる機会が増えた(+)
- 5) 人の前に立って少し堂々と話せるようになった(+)
- 6) 身ぶり手ぶりが増えた(0)
- 7) 大変だった(-)
- 8) 自分の日本語が少しおかしくなった(0)

その後、各項目の類似度を、「非常に近い」から「非常に遠い」までの7段階尺度評定してもらい、類似度距離行列を作り、クラスター分析を行った。その結果作成されたデンドログラムを図1に示す。

インタビューは、このデンドログラムを見ながら進めた。まず、クラスターをどこで分けるのが妥当か、学生に決めてもらった。その結果、大きく2つのクラスターに分けられた。さらに、そのクラスターがどのような内容でまとまっているのか考えてもらい、その内容を代表するタイトルを学生自身につけてもらった。クラスターのまとまりと学生がつけたタイトルを図1に示した。

学生Aは、デンドログラムを以下のように解釈した。

(1) クラスター1「外国人と触れる機会が増えることによって、自分が変わったこと、意識の変化」

留学生チューターを通して、自分が変わったこと

うーんと、その外国人と触れるっていう機会が増えることによって、自分が変わったことかなって、思います。

2年生だったか3年生の時に、留学生のチューター、をやった時に、その全然、その、やっぱりゆっくり話した方が伝わりやすいっていうのは、今ではわかるんですけど、それが全然わからなくて。

一対一で話しているときに、日本人の友達と話すのとおんなじような速さで、すごくしゃべったら、あまり伝わってない感じ(笑い)、があつて。そういう経験から、もうちょっとゆっくり、外国人と話す時は話そう。

あと、難しい言葉を使わないっていうのとか。ちょっと、よく思うのは、「話します」と「しゃべる」ってちょっと違うじゃないですか。しゃべるで通じなかった

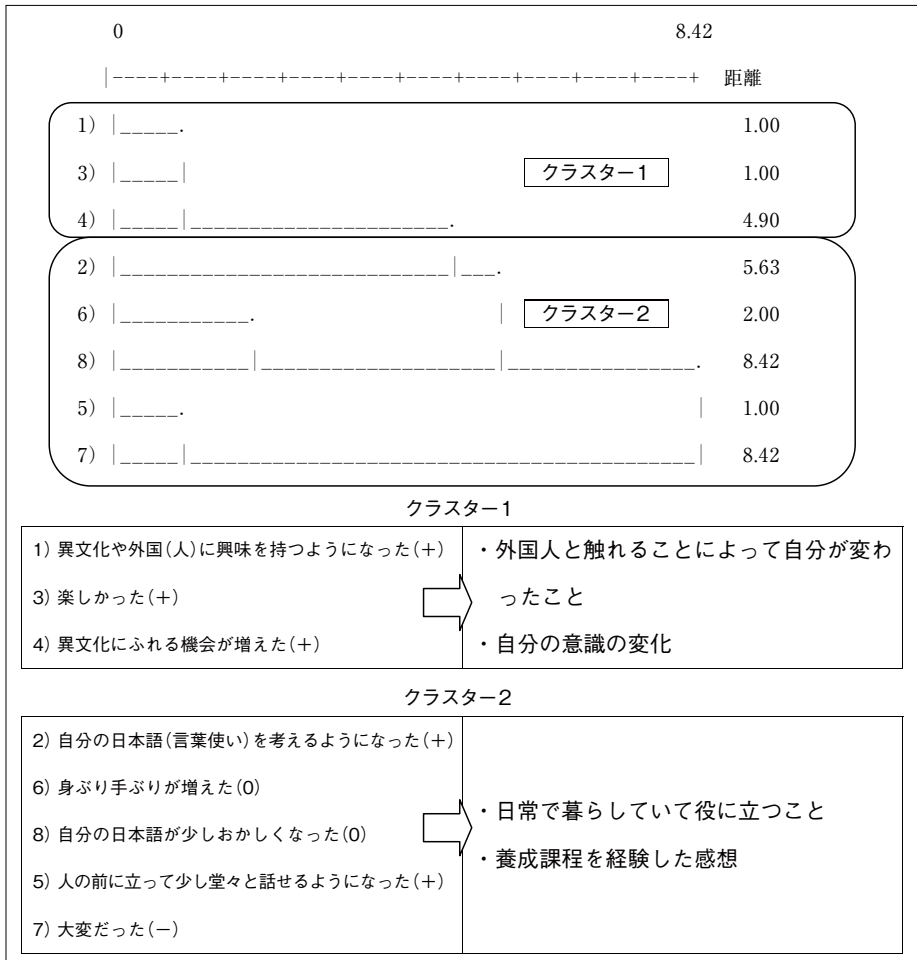


図1 学生A デンドログラムと学生が付けたタイトル

ら、ちょっと会話も止まっちゃうし、だからそこで、友達とは、しゃべるとか言いますが、その、留学生とかには、ちょっと一瞬考えてから、話すっていたり、そういうの考えるように。

外国、異文化に対する意識の変化

(外国に) あんまり、興味あんまりなくて。えっと、学校、中高のときとか、その、たまに外国人講師が来て、英語を習いに行ったりするんですけど、もう、関わりたくなくて、ははは(笑い)。話したくなくて。ちょっと話すのも苦手で、

もう一生日本で暮らしたい、ははは（笑い）。

日本語の教育課程を学んでいて、もう、最初のうちはまだ、外国とか興味なかったんですけど、あの、やっぱり、留学生さんもあったし、あと、日本語学校で関わったりする機会が増えて。えー、なんか面白いな。あと、学校で習った中国語が面白かったのと。で、それを、そのやっぱり、チューターもあるんですけど、そうやって外国人に触れる機会が増えて、で、なんか、誕生日の祝い方が中国では違うとかいって。日本とは違うとかいって、あ、違うんだ、面白くなって思うようになっていって。で、ちょっと興味が出てきたんですけど、そしたら、なんか、だんだん、そのー、なんだろう。そのうち、教育実習の時も、最初タイに行きたいって。ただ、なんかそうやって、増えるようになったら、なんかもう、いけるんじゃないかなって、駄目だって思ってたけど、やってみれば、なんとかなるんじゃないかな、ってちょっと考えるようになって。

(2) クラスター2「日常で暮らしていて役に立つこと、養成課程を経験した感想」
分かりやすく話す

人の前に立って、伝わりやすいって、わかりやすく話すってことは、大変なことかなって思ってるんで。だから、それを考えながら、人の前に立って、説明するとか教えるとか、そういうことが、その自分なりに、こうすれば伝わりやすいかなってか、考えるようにしたので。ちょっと……。あの、ベストな状態が、今はもう完成したってわけじゃないんですけど、その、作るまでが大変だったかなって。

(3) 全体として

なんか、すごい大変だったんですけど、その、課題もたくさん出るし。あと自分の日本語も見直さなきゃいけないし。でも、自分の文化とか言葉とか振り返ることができるのと、あと、ほかの文化の、日本との違いを知ることができたんで。うーん、その、意識、意識が成長したかなって感じがします。前は、やっぱり外国に興味がなかったけど。ま、それはあまり意味もなく、ただどうせ日本から出ないし、関係ないかなって思ってたんですけど。でも、今だと、やってみなきゃわからないかなっていう、そういう意識を持つようになったんで。そこが、そこを、（日本語教員養成課程が）変えたかな。

4.2 事例「学生A」の考察

学生Aのインタビューからは、養成課程で外国人とコミュニケーションをとったり、留学生のチューターをしたり、日本語学校を訪ねたりするなど、多様な活動に関わることによって、行動力が身についていく様子が伺われる。

クラスター1には、Aが解釈しているように、課程を通じての変化が表れている。その変化は異文化コミュニケーションにおける自己効力感の高まりであると考えられる。Aは、養成課程で日本語学習者と接することにより、関わりたくないと思っていた外国に興味を持つようになっていく。具体的な例として、英語講師を敬遠していたことや大学2年時に留学生とコミュニケーションしたときの失敗談をあげ、今は、発話をコントロールし、身ぶり手ぶりも交えながら意思疎通ができるようになったというエピソードが語られる。こうした成功の経験が少しずつ積み重なり、「駄目だと思っていたけれど、やってみればできるかもしれない」と異文化コミュニケーションにおける自己効力感を高めている。

クラスター2でも同様に、大変だった経験を乗り越え、人前で堂々と話せるようになったという自己効力感が語られている。養成課程での模擬授業や実習で、伝わりやすさを意識して授業計画を立てた経験から、以前のように話している途中で詰まったり、考えすぎて止まったりせず、話せるようになったとしていた。

ある行動ができるかもしれないという自己効力感は、次の行動への動機づけとなるといわれている（バンデューラ 1997）。今後について尋ねたところ、Aは卒業前に初めての海外長期滞在、中国へ3週間語学留学行くことが楽しみだと語っていた。異文化コミュニケーションにおける自己効力感が、Aの語学留学への参加という決断を後押ししていたと考えられる。

4.3 学生の教員養成課程での学び

日本語教員養成課程で日本語学習者や留学生と深い交流をすることで、異文化コミュニケーションや対人コミュニケーションにおける自己効力感が高まる事例は、他の学生（学生B, C）にも見られた。

学生Bは、連想項目に、「おもしろい体験」「コミュニケーションって楽しい」などを挙げ、「人とコミュニケーションするのが苦手って言うか…。話すのは好きなんですけど、緊張しちゃって、あんまり知らない人、初対面とかだと、何話すんだろうとかって思っちゃうんですけど、でもなんか向こうから結構寄って来てくれて、なんか色々話しかけてくれたっていうのもあるんですけど、まあ…色々あって、あ、コミュニケーションって楽しいなって。知らない人と話すのってすごい楽しいなって、

思いました」と、これまでの苦手意識を払拭し、コミュニケーションを楽しめるようになったと言っていた。

さらに、実習で大きな声を出し、一人で授業を進められたことから、「すごいなんか自信がついたっていうか。なんかもし、働いた時にも、例えば会議だった時とかに、なんか物怖じしないというか、何て言うんだろう、そういう…いろんな人がいる前で、大きな声で自分の考えに自信を持って発言できるようになれたこと。自信ができました」と、対面コミュニケーション全般について自己効力が高まっている様子が見られた。

今回のインタビュー対象者7名は、全員一般企業への就職を決め、職業として日本語教員を選択するものはいなかったが、養成課程で学んだことが他の事にも活かされると認識していた学生（学生C, D）もいた。

学生Cは、「今は教員にならなくても、他の環境で、学んだことを役立てたいと思った」と連想項目に挙げている。インタビューでは「自分が社会人になっても、教員とは全くはなれた職業ですけど、そこでやっぱりコミュニケーション、自分が飲食業に行くので、人とふれあう機会が多いので」と、コミュニケーション能力の応用可能性について述べている。課程を通じて出会った多様な背景を持つ人々との接触により、コミュニケーションへの自己効力を高め、それを仕事に活かせると述べていた。

さらに、課程で担当教員に聞いた話について言及し、「なんか、自分の中にすごい印象に残ってて。あの、教員にならなくても、昔のお知り合いの方で中国人が嫌いな人がいて、でも、接することで、中国にいけるようになったっていうの聞いて。やっぱ、偏見とかもなくすることができるかもしれないし。だから、なんていうんですか、人にやさしくなれるというか。そういう風にも役立てたいな」と、日本人と外国人との架け橋になりたいという希望を語っていた。

養成課程において達成感を感じている事例も、先行研究同様に見られた（学生E, F）。

学生Eは、「答えは一つではない」「『考え方』や『みちびき方』を教える」など日本語授業に関する連想項目を数多く挙げていた。インタビューでは、「満足できなかったけど達成感を得られたっていうのは、実際には全然満足できなかったんですけど、自分の積み上げてきたものをそこで披露できたっていう、やりきった感」と述べ、課程の中で1年次から少しずつ学んできた知識と教育現場での実践が結びついたことの喜びを示していた。

養成課程を、自己発見、自己対話の機会と捉えていた学生もいた（学生B, G）。学生Gは、連想項目に「自分で動いたほうが早い」「『一緒にやろうね』はムリ」「相

手にとって必要なことは自分が考えていることと違うことが多い」「大変なことこそ楽しむ」などを挙げていた。インタビューでは、「私けっこうめんどくさいから自分中心に考えることが多いんですけど。そのことは気をつけなくちゃいけないってわかってても、人のことを考えるのって面倒くさいことじゃないですか。相手が一人ならいいけど、いっぱいいると。全部できるわけじゃないし。だから、やっぱ、やんなきゃいけないことを面度くさくてもやんなきゃいけない」と、他者と交わりながら課題に取り組む事の難しさを語っている。そして、日本語教員養成課程を通じて、「けっこうなんか、自分のことがわかったかも」と述べていた。教員養成課程で困難に突き当たる度、学生Dが自己と向き合い、じっくり考えていた様子が伺われた。

5. 自己効力感を高める環境作りを目指して

既に多くの先行研究で、自己効力感が行動変容に肯定的な作用をすることが証明されている（バンデューラ 1997, 板野・前田 2002・2008等）。日本語教員養成研究においては、自己効力感という概念は一般的ではないが、河野（2009）は、実習生自身が向上することが楽しいものだと実感する機会を得ることの重要性を指摘している。日本語教員養成課程を通じて自分が向上できるという見通し、自己効力感を獲得することは、学生自身の成長にとって重要なことだと思われる。

どのようにして自己効力感を高めることができるのだろうか。バンデューラ（1997）は、自己効力感が生まれたり、修正されたりするには4つの源があるとしている。1つ目は、成功経験により、自分は成功の為に必要な事は何でもできるという確証を与える「制御体験」、2つ目は自分と同じような他者の経験の観察による「代理体験」、3つ目は周囲の人からの言葉による励ましやサポートといった「社会的説得」、4つ目はストレスやネガティブな感情を減少させ、身体の状態を正しく把握できる「生理的・感情的状態」を作り出すことである。これらは、日本語教員養成課程でどのように実現できるだろうか。

この中で最も重要なものは、自分自身のうまくいった経験「制御体験」であるという。本調査でも、自らの成功体験から、効力感を高めている事例が多く見られた。

養成課程では現在、日本語学校への見学、留学生との交流、模擬実習、本実習という経験の場が設けられている。それに学生自身が自らの行動を振り返り評価を与えるような活動を加えてはどうだろうか。例えば事前に各自に実現可能な目標を設定させ、体験後それがどのくらいできるようになったのか比較し、自己評価を行うことで、うまくできたかどうかを実感しやすくなると考えられる。

また、既に修了生の日本語教師の講演会などを催しているが、こうした他者の経験

を観察することで自己効力感が高まる「代理体験」を増やすことは可能であろう。代理体験はその他者が自分と似通っていればいるほど、効果的だということが分かっている。以前、自分と同じ年ぐらいの日本語教師の授業を見学して自己効力感を高めていた学生がいた（武田2008）。本調査でも、担当教員の経験談から、自分も偏見をなくすることができるよう働きかけていくとする学生がいた。学生と年齢の近い日本語教師との接触や、本学の修了生との交流により自己効力感が強化できると思われる。

さらに、周りからの励ましのことばによる「社会的説得」も意識的に行うことが求められる。特に模擬実習や実習等において、学生はできなかったことを意識しがちで、その結果、苦手意識を持つことも多い。振り返りの場面では、指導者や見学者はうまくできたところに重きを置いてアドバイスをするよう心がけること、仲間同士継続的に交流を行い励まし合えるような雰囲気作りや、そのシステム作りが重要である。

本調査では、他者と課題をこなすことに困難を感じている学生がいた。幸い、自分で乗り越えることができていたようだが、大変苦しんでいた様子であった。ストレスやネガティブな感情を減少させリラックスした状態を自ら作り出すことも自己効力感を高めるためには重要である。実習で緊張したとき、実習中にトラブルが起こったときの対処方法はもちろん、長期にわたる養成課程で意欲が継続しなくなったときにもどのように乗り越えるのかなど、学生同士情報交換ができる環境を整える必要がある。

今後も、学生が自己効力感を高めていけるよう、成功体験・代理体験のための支援や、適切な声掛け、学びやすい環境作りについて、調査を進めていきたい。

付記

本研究は、2010年7月3日第19回小出記念日本語教育研究会（於国際基督教大学）で発表したものに、加筆・修正をおこなったものである。

参考文献

- 板野雄二・前田基成 [編] (2002・2008) 『セルフエフィカシーの臨床心理学』北大路書房
河内和子 (2005) 『自信力が学生を変える—大学生意識調査からの提言』平凡社新書
河野俊之 (2009) 「日本語教師養成のための実習—実習とほかの授業との連携—」『日本語教育の過去・現在・未来 第2巻「教師」』河野俊之・金田智子 [編] 凡人社
武内清 [編] (2003) 『キャンパスライフの今』玉川大学出版
武田知子 (2008) 「大学生にとっての日本語教員養成課程の意義」第7回日本語教育国際研究大会 発表要旨
内藤哲雄 (2002) 『PAC 分析実施法入門 [改訂版]: 「個」を科学する新技法への招待』ナカニシ

ヤ出版

- 内藤哲雄・井上孝代・伊藤武彦・岸太一 [編] (2008) 『PAC 分析実践集 1』ナカニシヤ出版
- 中川かず子 (2001) 『大学教育における日本語教員養成—新教育内容を大学教育課程でどう位置付けるか—』『大学日本語教員養成課程において必要とされる新たな教育内容と方法に関する調査研究報告書』日本語教員養成課程調査研究委員会
- 「日本語教員養成」研究グループ (1997) 『日本語教員養成課程の現状分析とその将来の展望』科学研究費補助金総合研究 (A) 「日本語教員養成課程の現状分析とその将来についての総合的研究 (06306005) 報告書
- バンデュエラ, A (1997) 「激動社会における個人と集団の効力の発揮」『激動社会の中の自己効力』バンデュエラ, A [編] 本明寛・野田京子・青木豊・山本多喜司 (訳) 金子書房
- 文化庁 HP 日本語教育実態調査等「平成16年国内の日本語教育の概要 日本語教員の最終学歴」最終検索日2012年10月6日
http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/jittaihou/h16/gaikoku_6_06.html
- 文化庁 HP 日本語教育実態調査等「平成23年国内の日本語教育の概要 日本語学習者数」最終検索日2012年10月6日
http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/jittaihou/h23/gaiyou.html
- 溝上慎一 (2010) 「現代社会における大学生の学びとアイデンティティ形成」『「学び」の認知科学事典』佐伯胖 [監修] 大修館書店
- 横林宙世 (2001) 「地方小規模大学の『教員養成課程』の現状と課題—新たな教育内容との関連で—」『大学日本語教員養成課程において必要とされる新たな教育内容と方法に関する調査研究報告書』日本語教員養成課程調査研究委員会

注

- 1) 自己効力感は、心理学者アルバート・バンデュエラ (Albert Bandura) が示した概念で、板野・前田 (2002・2008) は Bandura (1985) を引用し、ある行動を起こす前にその個人が感じる「遂行可能感」、自分自身がやりたいと思っていることの実現可能性に関する知識、あるいは自分にはこのようなことがここまでできるのだという考えであると定義している。
- 2) PAC (Personal Attitude Construct 個人別態度構造) 分析は、個人別の態度構造を測定するために開発された分析方法である。詳しくは、内藤 (2002)、内藤・井上・伊藤・岸 [編] (2008) を参照されたい。